



— 縄文時代の大規模集落 —

特別展 三内丸山遺跡

# 現在の三内丸山遺跡

## 縄文時遊館

### 12 展示室 「さんまるミュージアム」

三内丸山遺跡の重要文化財 503 点とその他の出土品約 1,100 点を展示しています。

また、縄文人の生活を各場面ごとに再現しながら、豊かな縄文文化をわかりやすく紹介しています。



## はじめに

三内丸山遺跡は、青森県にある縄文時代の拠点集落跡です。

これまでの発掘調査で縄文時代前期中葉から中期末（約 5500 年前～ 4000 年前）の大集落跡や平安時代の集落跡（約 1000 年前）、中世末（約 400 年前）の城館跡の一部が見つかっています。

特に、縄文時代の大集落跡からは、たくさんの竪穴住居跡、掘立柱建物跡、大量の遺物が捨てられた谷、大規模な盛土、大人の墓、子供の墓、土器作りのための粘土採掘穴、貯蔵穴、道路跡などが見つかりました。

出土した動物や魚の骨、植物の種子や花粉からは、当時の自然環境や食生活などを具体的に知ることができます。

また、ヒスイやコハク、黒曜石は遠方との交流を、漆器は専門的な技術を持った人がいたことを物語ります。

このように、三内丸山遺跡は、縄文時代の人々の生活を具体的に知ることができる貴重な遺跡として、2000 年には国の特別史跡に指定されました。また、2003 年には出土遺物 1,958 点が重要文化財に指定されました。

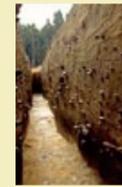
青森県では、縄文時代の「むら」を体感できる公園として、三内丸山遺跡の整備を進めています。

### 1 環状配石墓

### 2 道路跡

### 3 南盛土

覆屋内では盛土の断面の実物が見学できます。約 1000 年かけて積み重ねられた歴史の厚みを感じることができます。



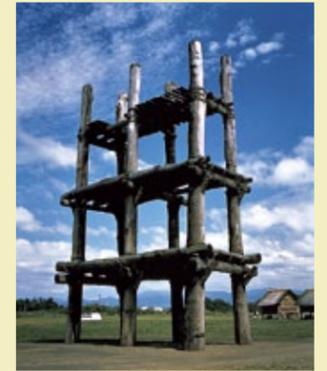
### 4 大型竪穴住居（復元）

復元したものは長さ 32 m で、11 棟見つかった大型竪穴住居跡のうち最大のものでした。



### 5 大型掘立柱建物（復元）

高さ 14.7 m の建物として復元しています。覆屋内では検出された柱穴を見学することができます。



### 6 子供の墓（埋設土器）

覆屋内では、埋設土器の実物を見学することができます。



### 7 北盛土

盛土に埋もれている多量の土器の出土状態を、実物で見学することができます。

### 8 北の谷

### 11 竪穴住居（復元）

上屋は、茅葺き、樹皮葺き、土葺きの 3 種類の復元をしています。



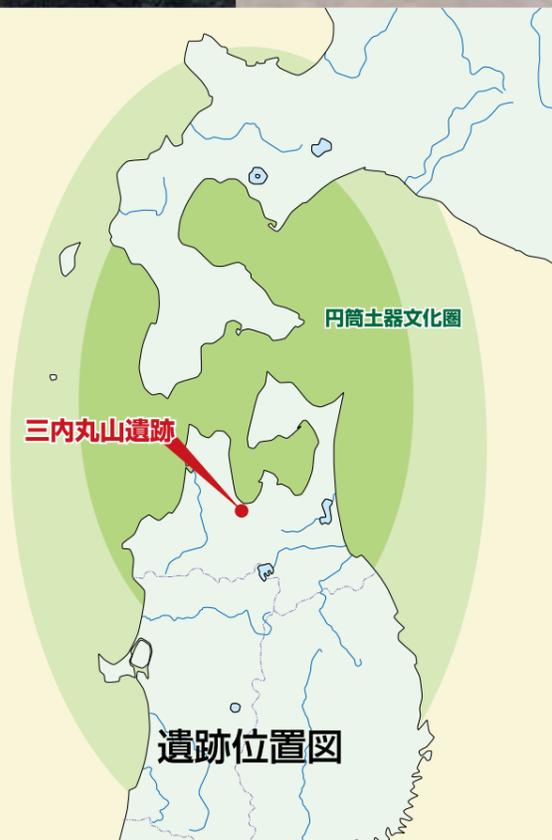
### 10 大人の墓（土坑墓）

長さ約 2 m の細長い墓穴で、大人を埋葬した遺構です。道路を挟んで列状に並びます。



### 9 掘立柱建物（復元）

高床建物として 3 棟を復元しています。



遺跡位置図

# 発掘調査時の三内丸山遺跡

## ① 環状配石墓【中期後葉】

周りを石で囲った大人の墓。南西側の道路跡に沿って並びます。



1

## ② 道路跡【中期中葉～後葉】

集落の東側と南西側につくられました。地面を5～14mの幅で掘削してつくられ、両側には墓が並びます。



2

## ③ 南盛土【中期初頭～後葉】



廃棄物などを積み重ね、約1000年間で小山のようになりまし。中から大量の土器、石器の他に、土偶やヒスイ製の玉なども出土しました。

## ④ 大型竪穴住居跡【前期～中期】

写真は前期末葉のもので、長さ15m、幅10m。拡張した痕跡があります。



## ⑤ 大型掘立柱建物跡【中期後葉】

写真は三内丸山遺跡の掘立柱建物の中で最大規模のもの。柱には直径1mのクリ材を使っていました。



## ⑥ 子供の墓（埋設土器）【前期中葉～中期中葉】



口や底を打ち欠いたりした土器に子供の遺体を入れて埋葬しました。住居の近くに多くつくられました。

## ⑦ 北盛土【中期初頭～後葉】



多量の土器・石器が、多量の土と共に積まれた場所です。厚さ2mを超え、全体が小高い丘となっています。

## ⑧ 北の谷



集落北側の谷地形を、縄文時代前期中葉～前期末葉に大規模な捨て場として使用しています。湧水により有機質の遺物が多量に出土しました。当時の環境・食生活などの貴重な情報を得られる地点です。

## ⑪ 竪穴住居跡【写真は中期初頭のもの】



円形や楕円形に地面を掘り込んで床を作り、中央には炉があります。床の形、柱配置などには時期毎の特徴もみられます。

## ⑨ 掘立柱建物跡【中期中葉】

地面に柱穴を掘り、柱を立てて屋根を支えた建物で、6本の柱穴が長方形に並びます。



## 世界史と三内丸山遺跡の比較年表

年代	時代区分	三内丸山遺跡	世界の出来事
今から約12000年前	旧石器時代		ラスコー洞窟壁画
約10000年前	縄文時代 草創期		
約6000年前	縄文時代 早期		中国文明の始まり
約5500年前	縄文時代 前期	集落始まる 縄文ポシエット作られる	メソポタミア文明の始まり 楔形文字の成立 エジプト文明の始まり
約5000年前	縄文時代 中期初頭		アルプスで「アイスマン」死亡(スイス)
約4500年前	縄文時代 中期前葉	大型板状土偶作られる	
約4500年前	縄文時代 中期中葉	集落の最盛期 墓と道路420mに達する	クフ王のピラミッド建設(エジプト) インダス文明の始まり
約4500年前	縄文時代 中期後葉	長さ32mの大型住居作られる	
約4500年前	縄文時代 中期後葉	大型掘立柱建物作られる	
約4500年前	縄文時代 中期後葉	環状配石墓作られる	
約4000年前	縄文時代 中期末葉	集落の終わり	
約4000年前	縄文時代 後期		ハンムラビ王の法典碑(前1760年) ツタンカーメン王即位(前1334年)
約2000年前	縄文時代 晩期		
約2000年前	弥生時代		秦の中国統一(前221) コロッセウム建設(78～82)
約1000年前	古墳時代		
約1000年前	飛鳥奈良		コーラン成立(653)
約1000年前	平安		
約1000年前	鎌倉		チンギスハン即位(1206)
約1000年前	室町		コロンブス、アメリカ到達(1492)
約1000年前	安土桃山		
約1000年前	江戸		

## 発掘調査の歴史

三内丸山遺跡に関する最も古い記録は江戸時代のもので、三河出身の紀行家、菅江真澄が三内を訪れ、土器や土偶のスケッチをのこしています。

1953年から1967年にかけて、慶応義塾大学や青森市教育委員会などによる発掘調査が行われました。1976年・1987年にも青森県教育委員会や青森市教育委員会が南側の一部を発掘調査しています。

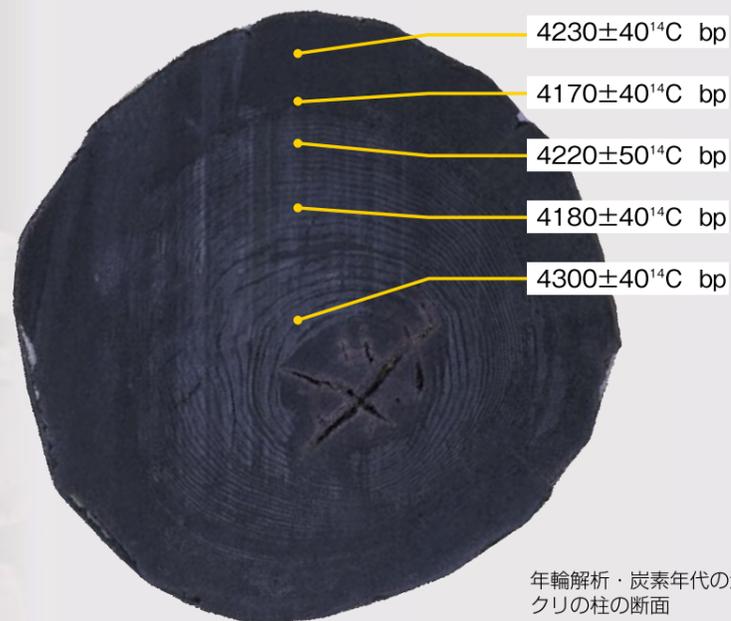
1992年から始まった県営野球場建設に先立つ発掘調査で、前例のない巨大な集落跡が姿をあらわし、膨大な量の土器や石器、土偶などが出土しました。

1994年6月には、直径約1メートルのクリの巨木を使った縄文時代中期の大型掘立柱建物跡が発見されました。遺跡の保存を求める世論の高まる中で、同年8月に青森県は遺跡の重要性を考慮し、途

中まで進めていた野球場の建設工事を中止し、遺跡の永久保存と活用を決定しました。その後、遺跡は遺構・遺物の保護のために埋め戻され、整備が進められています。

保存決定後も、2011年までに第1次～第35次調査が行われ、遺跡全体の約40%の確認調査が行われています。

# 環境



年輪解析・炭素年代の測定を行なったクリの柱の断面



炭化したクリ



遺跡のニワトコ

三内丸山遺跡は八甲田山に連なる台地の縁に位置し、標高は約20mです。集落のすぐ北側には沖館川が流れています。

花粉分析の結果から、集落ができる前に広がっていたナラ類やブナの林が、居住が開始されると急激にクルミ属やクリ林にとってかわったことがわかりました。これは自然な植生の変化ではなく、人の手によってクリ林が作られたことを示すものである、と指摘されています。花粉だけではなく、谷などからは廃棄されたクリの果皮が大量に出土し、クリが重要な食料であったこともわかります。また、建物の柱や道具もクリで作られていました。さらに、燃料としても多量に使用されており、三内丸山の人々にとってクリは重要な植物であったことがわかってきました。

三内丸山遺跡では主に2箇所の低地から出土した資料をもとに、花粉分析以外にも菌類・藻類・植物珪酸体・種実類・木材・植物のDNA・魚骨・動物骨・昆虫・寄生虫の分析等が行われ、自然に対して積極的に働きかけていた縄文時代の人々の姿が明らかになっています。

# 食料



出土した各種の骨



マダいの骨（推定体長約1m）



オニグルミの出土状態



ニワトコ種子の出土状態

低湿地からは動物の骨や植物の種子が大量に出土しています。

動物ではノウサギ、ムササビなどが多く、シカ、イノシシなどの大型獣が少ないのが三内丸山遺跡の特徴です。クジラ、アシカなどの海獣の骨も見つかっています。

鳥類ではガン・カモ類の骨が多く見つかっています。

魚類ではブリやサメの椎骨が目立ちますが、生息環境や漁獲時期が異なる多種多様な魚種が含まれており、縄文人の漁労活動に関する知識の豊富さをうかがうことができます。毒への対処を必要とするフグの骨も見つかっています。

土壌を水洗選別したところヤマブドウ、サルナシなど植物の種子も多量に検出されました。特に注目されるのはニワトコで、出土状態の検討を通じて酒づくりの可能性も考えられています。

大型の種実ではクリ、オニグルミ、トチなどの堅果類や栽培植物であるヒヨウタンが見つかっています。



さまざまな種子

# ムラの変遷



縄文時代前期



縄文時代中期前半期

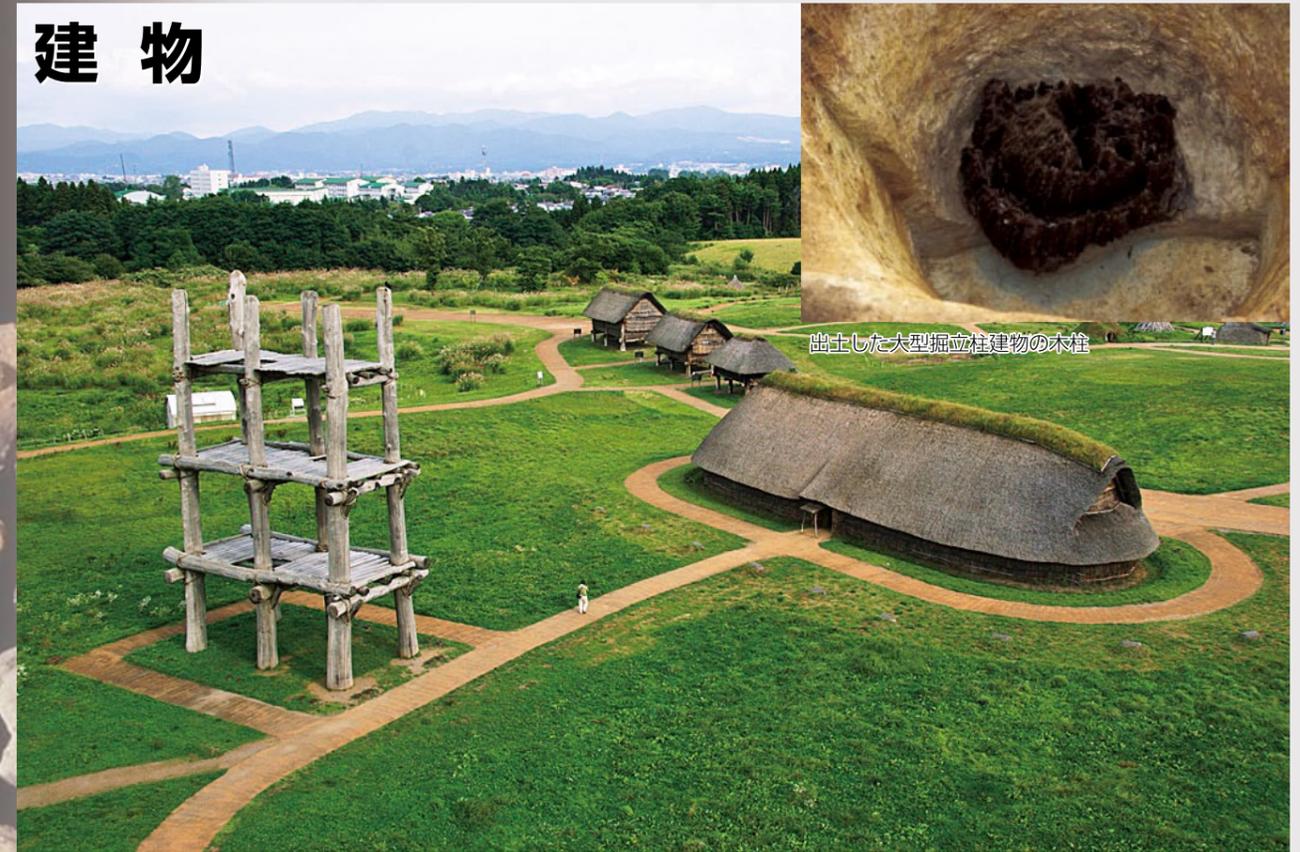


縄文時代中期後半期

- 竪穴住居
- 大型竪穴住居
- 道路と土坑墓 (大人の墓)
- 盛土
- 斜面・谷の捨て場
- 埋設土器 (子供の墓)
- 貯蔵穴
- 掘立柱建物

0 200m

# 建物



出土した大型掘立柱建物の木柱

復元された大型掘立柱建物と大型竪穴住居

縄文時代には竪穴住居、掘立柱建物などがあります。

住まいには、地面に円形・楕円形の穴を掘り込んで作った竪穴住居が使われました。三内丸山遺跡ではこれまでに縄文時代前期から中期の竪穴住居跡が500棟余り見つかっており、平面形や柱の並び方、炉の形態が、



密集する竪穴住居跡

時期によって変化する様子をうかがうことができます。一般的な竪穴住居は直径3~4m、面積10㎡くらいですが、各時期1棟くらいの割合で、特別に大きな住居が作られています。それらは大型竪穴住居とよばれていますが、三内丸山遺跡で最大のもは長さが32mもあります。集会場や共同作業場などに使われたのではないかと考えられています。

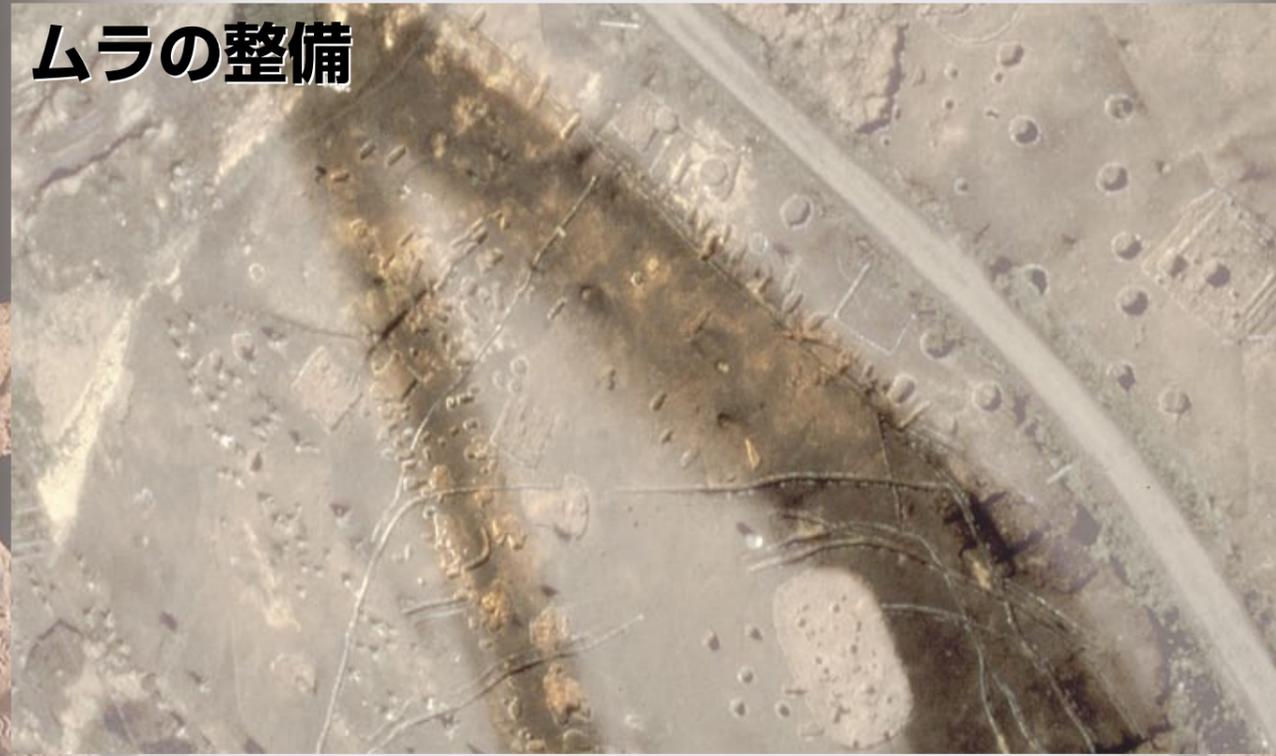
北盛土と南盛土の境目付近を中心に、掘立柱建物も作られました。柱穴のみで床や炉が無いので、高床建物と推測されています。倉庫、葬制に関連する施設などの用途が考えられます。



密集する掘立柱建物跡

掘立柱建物の中で最も巨大なものは、遺跡の北西端で見つかった大型掘立柱建物です。用途としては、神殿、物見やぐら、モニュメントなどの説が唱えられています。クリの木による6本の柱を長方形に配置した建物で、確認された柱の太さはそれぞれ約1mもあります。柱の間隔(中心から中心)は4.2mです。その他の建物の柱間隔も検討した結果、35cmか70cmが長さの単位になっていたのではないかと考えられています。

# ムラの整備



東方向に延びる道路跡（色の濃い部分：写真はわかりやすく加工したものです）



南盛土の断面



西盛土の中の多量の土器

道路跡と考えられる遺構は、集落の中心部から東方向に420m、南東方向に370m延びるものなどが確認されました。幅5～14mで平らに地面を削り、地盤が軟弱なところには硬い土が撒かれました。

こういった土木工事で掘り起こされた土は、土器や石器などの使われなくなった道具とともに、集落内の決まった場所に積み重ねられました。盛土は、こうした行為が繰り返された結果、周囲より2mほど小高い丘となったものです。まだ使える道具や貴重品なども多く、単なるゴミ捨て場ではなく、土や道具を自然に戻す儀式を行った結果であったとも考えられます。

三内丸山遺跡では集落内の施設配置に規則性が見られます。道路の導線が守られ、盛土は道路を避けて造られます。掘立柱建物群には道路が接続し、道路の両側には大人の墓が並びます。竪穴住居は大人の墓とは離れた場所にあり、掘立柱建物や盛土遺構で区画された範囲に作られます。一方、子供の墓は住居の近くに集中します。そしてこのような関係は、およそ千年間にわたって維持され続けました。

# 道具 1 (土器・石器)



円筒土器



石器



磨石と石皿

土器と石器は最も代表的な出土品であり、ダンボール箱4万箱に及ぶ遺物出土量の大半を占めます。その量は三内丸山集落の大きさと継続期間の長さを物語っています。

土器は、口が少し開いたバケツ形をしており、縄文土器と呼ばれ、縄文土器の名前の由来である縄目の模様が付けられています。縄文時代前期のものは、さまざまな種類の縄を転がしたり、押し付けるなどして模様がつけられます。中期のものは粘土紐を貼り付けて模様にしたたり、突起がつくものが多くなります。土器は主に煮炊きに使われた深鉢形が多いのですが、皿形や漆が塗られたものもあります。

石器は、石鏃などの狩猟具や、石錐をはじめとする各種の加工具・利器、磨製石斧、木の実などをすりつぶした石皿、まつりの道具など種類も豊富です。

## 道具2 (漆・木製品・骨角器)



中にクルミが入っていた編みカゴ



角製の釣り針と鈎



骨製の針



谷から出土した掘り棒



谷から出土した漆器

遺跡内の低地からは、前期中葉の有機質の遺物が出土しています。木製品には用途が明確にわかるものは少ないのですが、土を掘るための掘り棒や漆塗りの容器・櫛などが見つかっています。漆器の他に、漆器製作に使用する用具やウルシの種子も出土しているので、この地で製作が行われたと考えられます。また、樹皮で編まれた小型のカゴも出土し、植物を材料にした容器類も豊富に使用していたことがわかります。

骨角器では銚・釣り針・針・錐・ヘアピンなどが出土しています。一番数が多いのは針で、長さ・太さ・針穴の大きさなどで様々な種類があり、用途に応じて使い分けていたことがわかります。また、動物の肋骨を使用した針が多いのが三内丸山遺跡の特徴です。

## 装飾品とまつりの道具

土器や石器などの日常品以外にも装飾品やまつりに使われたと考えられる遺物がたくさん出土しています。



(左上) 耳飾り  
(左下) 石冠



(右上) 編布の破片  
(右下) 骨刀などの骨製品



土偶・岩偶・三角形土製品

装飾品には粘土や石で作られたペンダントや耳飾り、動物の骨や牙で作られたヘアピンやペンダント、赤漆が塗られたたてくしの堅櫛などがあります。細い蔓のようなものを用い、2本ずつの5組にして編んだ組紐はプレスレットと考えられます。たて糸によこ糸を絡めて編んだ編布の破片も出土しており、衣類の可能性も考えられています。

まつりに使われたと考えられる遺物は、土偶、岩偶、ミニチュア土器、三角形土製品、石棒、石冠、イノシシを模した土製品、クルミの殻に粘土を押しつけてつくったと考えられる土製品、クジラの骨製の刀などがあります。

中でも、土偶は2,000点余り出土しており、他遺跡に比べると圧倒的な出土数です。この時期の土偶は板状の十字型をしていて、顔・胸・ヘソが表現されています。多くは破片で出土し、完全な形に復元できるものはわずかです。離れた場所から出土した破片が接合する例もあります。

これらの遺物は盛土から多く出土し、盛土でまつりが行われていたと考えられます。



(左) ミニチュア土器  
(下) 土製品・石製品



# 埋葬の方法



大人の墓（土坑墓）



子供の墓（埋設土器）

環状の配石を伴う土坑墓  
（環状配石墓）

大人の墓は、集落の東部では約 420 m、南西部では約 310 m、西端部では約 40 m にわたり、それぞれ道路跡に沿って列状に並んでいます。その多くは楕円形の墓穴（土坑墓）で、上に石が置かれたものや、土を盛り上げたものもあります。他に、墓穴の周囲に石を環状に並べたもの（環状配石墓）もあります。集落の南西部の墓列内では、約 210 m にわたって環状配石墓が列状に並んでいます。また、中からヒスイ製の装身具や石鏃などの石器や、赤色顔料が見つかった墓もあります。

子供の墓は、北盛土と北の谷に隣接した集落の北東側でたくさん見つかっています。日常生活で使用された土器の底に穴をあけ、棺に用いました。中には大人の墓と同じように石器が入られたもののほか、拳大の石が入られたものもあります。



道路に沿って並ぶ墓



重複して並ぶ墓

# 交流・交易



ヒスイ製の<sup>たいしゅう</sup>大珠



ヒスイ原石・未製品



北海道産黒曜石の石鏃

日常生活に必要な道具の多くは、土器をはじめとして周辺の材料を使用して、集落内で作られました。しかし、中には産地が遠くであったり、理化学的な分析により、離れた地域から運ばれてきたと推定できるものがあります。代表的なものがヒスイと黒曜石です。

ヒスイは縄文時代の人々に愛好されましたが、三内丸山遺跡のある本州北部から北海道南部の遺跡から多く出土しています。約 500 km 離れた新潟県糸魚川市周辺のもが使用され、大珠などの完成品のほかに原石、加工途中のものも出土しており、遺跡内で加工が行われたようです。黒曜石は各地の産地のものが使用され、北海道や約 580 km 離れた長野県産のものも含まれていました。

他にも石鏃を矢に固定するために使用されたアスファルト、コハクなど 100 ~ 200 km 圏内のものが運ばれています。そして、魚などの食料、製作に専門的な技術が必要な漆製品などさまざまなものが流通し、人が交流し、情報や技術が交換されていたと考えられます。

三内丸山遺跡では、遺跡と縄文文化の魅力や価値を伝えるため、遺跡を活用したさまざまな取組を行っています。



体験工房での勾玉づくり



イベントでの「火おこし体験」



発掘調査現地説明会の様子



マスコットキャラクター「さんまる」



ボランティアガイドによるガイド

青森県教育庁 文化財保護課 三内丸山遺跡保存活用推進室

〒038-0031 青森市大字三内字丸山305（縄文時遊館）

Tel. 017-781-6078 Fax. 017-781-6103

URL <http://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/>